[三章　聖地激動](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\(%E7%94%9F%E8%82%89)5%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%95_%E2%80%95%E7%B4%84%E6%9D%9F%E3%81%AE%E5%9C%B0%E2%80%95_(GA%E6%96%87%E5%BA%AB%20-%20%E4%BD%90%E8%97%A4_%E7%9C%9F%E7%99%BB%20-%20%E5%89%AF%E6%9C%AC\OEBPS\text00020.html#toc-004)

聖地を通り過ぎた先は、 やかな丘陵地帯になっている。

　丈の短い草花の生い茂る穏やかな坂を登ると、頂点にある しい雰囲気を し す修道院にたどり着く。その修道院に所属している人員が他とは一線を画するのだが、外観に特徴はないため誰かの興味をひくことはない。

　修道院を丘のてっぺんにして再び下りになるすそ野には少し不思議な光景が広がっている。

　細い のような石碑が等間隔で並んでいるのだ。

　銘が彫られるでもなく、装飾もない一メートルほどの石には他と差別化しようという意思がまるでない。すべてが等しく、見分けをする意味もないほど均一に地面に打ち付けられて並んでいた。

　そこは墓地だった。

　下り坂を っている一本一本が、世界のどこかで死んだ の墓標だ。巡礼者が見ることのない西の奥地にあるのは、世界中の殉教者を弔う慰霊地だった。

　しばらく留守にしていた修道院に姿を現した は、誰のものとも知れぬ墓標に寄りかかりながら見慣れた風景を眺める。

　処刑人という の暗部を育てる ら、聖職者の墓地の管理を担うのが 『 』の任された修道院の表向きの役割だ。

　 の多くは、死んだ後に名を残すことなどない。

　あくまで慰霊の地であるため、石碑の下に遺骸や遺品が実際に弔われることはまずない。大陸各地の教会で死亡した の人数を集計し、数えられた分だけ石の墓標が増えていく。

　芸術性もなく、無機質で作業的に並んでいるだけだというのに、数が うと壮観になるのだから不思議だ。

　並ぶ墓石を磨いているのは修道女たちだ。丘の上にある修道院で処刑人になるために集められた少女たちである。仮にも彼女たちの統括者である は作業を見守るでもなく眺めながら、指に挟んでいた紙巻 をくわえる。

「火」

『イエス、マスター』

　一文字の要求に えるべく、 が に抱えた教典から魔導構築がされる。

『導力：接続──模倣回路・擬似概念【光】──発動【劣・光熱】』

　発動した魔導によって導力が物理現象へと変換され、光が集中して熱となる。

　ちりりと煙草の げる音を聞きながら、一吸い。煙草の先に火がともる。

【光】の擬似概念。

　便利な魔導だ。いまのように光熱を集めれば攻勢魔導にもなるし、なにより視覚に干渉できるという点で、この上なく優れている。かつて一人の異世界人が召喚された際に星の源泉から付与された概念であり、純粋概念【光】を気ままに操った彼女が となることで魔導として世界に遍在することになった。

　純粋概念を持つ異世界人を召喚する真の意義は、彼らという個人の力を求めるものではない。

　召喚の際に異世界人の魂に純粋概念を付与することで星から概念を引きずり出し、魔導として人類の手中に収めることにある。

　立ち上るか細い紫煙を目で追いながら、口の中で煙を遊ばせる。

　 である煙草だが、普段は吸わない。味わいは好きでもないし、なにかに依存するほど弱くもない。なにより煙の臭いが付く上、常習すれば体臭にもなる。

　 を引退したといっても、いつ何時、陰から人を殺すことになるかわからない立場だ。暗殺者が本分である彼女が、隠密の妨げとなる煙草など好むはずもなかった。

　体の害になる。戦いの不利になる。下手をすれば死に直結する。

　悪いことだらけだからこそ 『 』はどうしても無駄なことをしたくなる衝動に駆られると、一本だけ煙草を吸うことを決めていた。

　自虐に都合がよすぎる道具だ。大きく口を開け、 をならして煙を吐き出す。

　くはっという音とともに白い煙が宙を泳ぐ。

　これが肺を み、いつか自分を殺すことに期待でもしているのだろうか。気の長い自殺に して、人差し指と薬指で煙草を挟んだ手を下ろす。

　腰元から体に みつく紫煙が立ち上る。

　吸わずとも、火のついた煙草の長さがじりじりと減っていく。煙を味わいたいという欲求がないためか、口元から離してただ無駄に燃やしていく時間がもっとも心落ち着く。

　自分の人生も、こうして燃え尽きてしまえばいい。そう思うのに、自分を焼きつくす炎など存在しないことが 『 』の不幸でもあった。

　多くの人間を殺してきた。人を殺して、命を食らって生き延びた。 が初めて殺した人間は、 だった。自分の人生と人格に大きな影響を与えた事件の犠牲者も、きっとここで眠っている。

　のどかな丘に並ぶ石のどれかが、彼女たちが生きて、自分が殺したことを証明している。

　ふと、ここにはいない死者を思い出す。

　彼女が『 』と呼ばれ始めた頃にできた、友人だった異世界人。

　──吸い方に品がないね、君は。

　人に煙草の吸い方を教え込んだくせに指をさしてけらけらと笑った の声が、ふと によぎった。

　ムキになって矯正しなかったのは、いま思えば彼女の思惑通りだったのかもしれない。

　再び煙を吐き出すのに合わせて、口を開いて笑う。くはっとあくびにも似た大口から、笑い声と一緒に煙が吐き出された。

『マスター。先ほどから思っていましたが、その吸い方は少々品が──……!? 　ま、マスター、焦げます！　私は灰皿代わりにはなりません！』

　悲鳴を黙殺して、 は無慈悲にもおしゃべりな教典を灰皿代わりにして灰を落とす。

　先んじて教典を黙らせたのは、苦言がうっとうしかったからではない。

　この教典に宿る意識はあいつではない。だというのにたまに顔をのぞかせる共通する言動が、どうしようもなく つ。

　教典をベースに、生きていた人間の精神と魂を ぐことで意識を創りだす擬似生命体。導力生命体の成りそこないにして、自分の弱さがつくってしまった失敗作だ。

　かつては殺意こそが自分の存在価値だった。

　人を殺して生まれたのが自分だった。人を殺して育つのが自分だった。

　それ以外のものを求めた時に、『 』の運命は行き止まりになったのだ。

　一人を殺せればよかった人生だったというのに、他人の命を求めた。世界が変わるかもしれないと、本気で思ったことがあった。そして当然のように、期待のすべては消えてなくなった。

　つまり、どうしようもないのだ。

「黙っていろ。お前は道具だ。わかったな？」

『……イエス、マスター』

　それでいい。

「さて、メノウも待っている頃だろうが……エクスぺリオンに巻き込まれては、たまったものではないな」

『来ているのですか？』

「まず間違いない」

　アーシュナ・グリザリカに有無を言わせない強さを持つのはエクスぺリオンだけだ。優秀な人間を偏愛するグリザリカの病弱姫は、今代のグリザリカ王家の中で末の妹だけを愛している。

「あれも【 】の一人だからな」

　最強でも無敵でもない にしたら、殺意を向けられたくない人間は何人かいる。死を超越しかけているゲノム・クトゥルワしかり。【 】にして大司教のエルカミしかり。グリザリカの であるエクスぺリオン・リバースもその一人だ。

　当然、不出来な弟子はその中に入らない。

『マスターは弟子をどうされたいのですか？』

「殺すさ」

『それにしては、ひどく迂遠です』

「そうか？　まあ、多少の期待がないでもないからな」

　導力量にも恵まれず、身体能力にも恵まれず、結果としてわずかな取り柄だった導力操作を めたといっても過言ではない だが、彼女をして唯一、不可能な技があった。

　生きた他人と導力を接続する、導力の相互接続。

　メノウとアカリが く行うあの技は、この世界では他にできる人間がいないほどの奇跡の結晶だ。

　事実、『 』もできなかった。

　できるはずだと信じていた友人とも、耐えがたい痛みが発生して互いの精神を削った。どれだけ受け入れたつもりであっても、どれだけ受け入れてくれると信じていても、理想値からは程遠かった。

　導力の相互接続とは、互いに魂を差し出す行為だ。

　魂に触れる導力操作を一方的に可能とするメノウは、自分の真価を知らない。

「期待を超えていれば、少なくとも私など問題にはならないはずだからな」

『……それは、マスター。いささかご自分を過小評価しすぎかと』

「そうか？」

　少なくとも がメノウならば、いまの『 』程度は問題にしない。メノウ自身が自覚していない彼女の特異性はそれほどのものだった。

「私に殺されるのなら、その程度だということだ。私を超えることができなかったのならば、弟子である価値はないからな」

　煙草の熱が指にまで伝わってきた。短くなった煙草を指ではじいて捨てる。

『導力：接続──模倣回路・擬似概念【光】──発動【劣・光線】』

　教典から放たれた光熱が、空中で吸い殻を焼き尽くす。

　ゴミの処理役として優秀なのは認めざるを得ない。くつくつと喉を鳴らすと、教典が不服そうに明滅する。

『マスターは、わかりにくいのです』

「誰かと感情を共有するのが嫌いなものでな」

　 は白く輝く聖地に視線を向ける。

　歩いて一時間ほど。

　 はゆっくりと、聖地に向かって歩き始めた。

　お互いに大聖堂に入り込んだ日の翌朝、メノウとモモは密会をしていた。

「モモ、あの の人の手伝いを任されたのね」

「はい、ちょうどいい相手が上役につきましたぁ！　人がいいんで、うまくすればいろんな情報が絞れそうですぅ」

　メノウにとってみれば列車の降車時に出迎えにきた神官、モモにとっては のいい情報源扱いであるフーズヤードである。

　二人が話している場所はメノウが滞在している南塔の部屋である。モモはどうやらフーズヤードと同じく大聖堂の中にある奇妙な駅舎の部屋で寝泊まりをすることになっているらしい。そこを抜け出してメノウに会いに来ていた。

　エルカミは出入りもままならない大聖堂にモモを閉じ込めて情報を遮断しようとしたのだろうが、メノウが先んじて潜入に成功していたため逆に密談が簡単になっていた。

「大聖堂っていうくらいだからどんなものだって思いましたけど、内部はざるですねー」

「それだけ外部の対策に自信があるんでしょう。実際、正攻法じゃ侵入は無理よ」

「でもモモと先輩の二人は入れましたぁ。あのメガネの情報だと、導師は大聖堂内じゃなくて修道院にいるみたいですー。いまなら、あのおっぱい女に接触することもできると思いますぅ！」

「うん……でも、意味がないわ」

　侵入はできたが、出ることができない。いまはまだアカリと接触するタイミングでなかった。

「塩の大地までの転移陣ができるまで、待つしかないわね。モモが『龍門』の管理人と接する立場にいるのは、かなり助かるわ」

「えへへー」

　先行して探っていたモモの情報に感謝する。

『龍門』を管理している彼女は聖地を攻略するとっかかりになる。塩の大地までの長距離転移に大聖堂の出入りの管理。メノウが行動する上で、欲しい情報が彼女には集約している。

「ところで先輩ー」

　情報交換の最中。モモは部屋の片隅でニコニコしている男を見もせず指さす。

　ひゅんっとモモの表情から笑みが消える。瞳孔が広がり殺意が宿る。

「あれ、なんですかぁ？　殺していいですよねー？」

「あれは気にしなくていい存在よ」

　メノウもカガルマのあしらいかたについては慣れてきた。

　害はないのだ。ニコニコしてモモを見ているカガルマの視線から、後輩の姿を遮る位置をとる。

　モモからすると、メノウと同室にいるという時点で許しがたい存在だ。しかもそれが怪しいおっさんとくれば、拒否感はひとしおである。

「じゃあ、モモはしばらくあのメガネについて情報を引っ張りますぅ」

「わかったわ」

　行動を打ち合わせて、解散となった。

　転移の儀式魔導陣。

『龍門』と地脈を使った長距離の瞬間移動と呼べる魔導の原理は、メノウたちが聖地に来た特殊な魔導列車と変わらない。

　導力で道をつくり、対象を一時的に導力体に変換して任意の場所で再構成する。個人での【転移】はそれこそ純粋概念の持ち主でもない限り不可能ではあるが、大聖堂には古代遺物である『龍門』がある。これを使えば、メノウたちが乗ってきた魔導列車と同じ理屈を再現することはできる。

　とはいえ、さまざまな制約が き う。

　最大の問題は海を隔てた先にある塩の大地にまで、地脈の経路がないことだ。導力の経路がなければ、魔導の効果はつながらない。かといって人力で導力をつなげる距離ではない。フーズヤードの知る塩の大地の座標は、大陸にあるもっとも近場の港町から出航しても数週間は到着に時間がかかるほど、遥か彼方にあるのだ。

　だが、方法がないわけではない。事実として、フーズヤードの前任者は幾度か塩の大地への経路をつなげて【転移】を行使した。

　世界には、地脈と同等以上の導力の脈流がある。

　天脈だ。

　天脈は上空を流れる龍脈であり、地脈と ない導力の大動脈である。膨大な【力】でありながらも地脈と違って都市エネルギーとして活用されていないのは、上空の流れが固定されていないことである。移り変わる流れをつかむのは困難を極めるため、並の魔導行使者ならばさじを投げる。

　だが、こと龍脈に関わる魔導に限定すればフーズヤードは れもない天才だった。

「……」

　金色に輝く『龍門』の前で をつき、祈りを捧げる彼女の全身から、神秘の気配が香り立っていた。

　深淵に触れる儀式が見せる没我の極致。夢とうつつの境にあって賢者のごとき全能感に酔いしれる。いまのフーズヤードはまさしく、人知の及ばぬ奇跡を乞う聖職者そのものだった。

　いまのフーズヤードを目にすれば、誰もが見入るほどに陶然とした集中力だ。

　彼女が手に握るのは金色の鍵だ。三つの鉱石を組み合わせ、十二の宝石をはめ込んだ導器。厳選した素材にフーズヤードが手ずから刻んだ三十三の紋章が連なる魔導式が、導力を通じて彼女の精神を『龍門』へとつなげて天へといざなう。自分の導力を、細く、細く、高く、天まで届く位置へと接続する。

　尋常な魔導発動とは一線を画する、導力接続。

　フーズヤードの魂は、天の流れに沿っていた。彼女からすれば導力は支配するものではない。精神で操るのではなく、あくまでも流れに寄り添い、願い祈れば応えてくれる。

　魔導行使とは、【力】との対話だ。

　フーズヤードは星の一部とつながっていた。転移魔導陣の作製にかかる労力は、導力路を げることにある。任意の場所に移動するには、細くとも、いままでになかった道をつくる必要がある。つなげるべき道は、距離があればあるほど困難になる。

　聖地にいる神官千人の中で、発動可能な人物は両手の指の数ほどいない秘儀。

『龍門』を通じた長距離転移魔導陣の作製が、成った。

「──つながった」

　無心にして忘我の境地から、意識ある人格の現世へと覚醒する。

　フーズヤードは困難な儀式魔導陣を成功させていた。西の聖地から、遙か海を隔てて浮かぶ塩の大地まで。どんな船乗りだって航海を諦める海洋を超えて、転移の道をつなげてみせた。

　ここまで長距離なのは、フーズヤードも初めてだ。じぃんと胸が打ち震える。

　自分が汗だくなのに気がつき、ふうっと満足げに腕で額をぬぐう。

「またかわいい子をつくってしまったよ。ふふふふ」

　自分がつくった導力路に我が子でも見るかのような視線を向ける。どう言い繕っても変質者の言動だが、幸いなことに目撃者はいなかった。

　期日通り、無理難題を切り抜けた。とりあえず今日の作業は終わりだ。転移陣から大聖堂へ。部屋に戻ると、モモが待機していた。弾むフーズヤードの足取りに、モモが な顔をする。

「どうしたんですか。機嫌がいいっぽいですけど」

「わかっちゃう？　いやー、きっつい仕事が終わるんだぁ！」

「へえ」

　気楽なフーズヤードの返答に、モモの瞳が、きらりと光った。それを見逃したのはフーズヤードが研究者向きの魔導行使者だからだ。

　のんびりした性格である彼女には、状況が目まぐるしく変化する戦闘はまったく向いていない。ゆっくりと時間をかけ、素材と魔導式を積み上げて発動させる儀式魔導を愛している。地脈の流れが強く感じられるところならば一日中過ごしても退屈することはないし、天脈の調査に駆り出されれば大陸にある霊峰をいくらでも踏破してみせる。

　龍脈にかける情熱に関しては、人後に落ちない神官だ。

　反面、対人感情にはだいぶ鈍かった。

「モモちゃんさん、ちゃんと魔導の勉強すればいいのに。才能あるよー。楽しいよー？」

「余計なお世話です。できる気がしないんで、いいんですよ」

　ダメかぁ、と肩を落とす。

　結局フーズヤードがモモに任せているのは、書類仕事の手伝いなどの雑用である。魔導技術に わる部分は触らせていない。モモの導力操作技術が、そこまで至っていないからだ。

　雑用の時間が節約できるので助かってはいるのだが、せっかくできた後輩にも龍脈に関わる儀式魔導の快感を教えたいのだ。

　基本的にスペックの高いモモは、いままで特に問題なく力ずくで押し通していたのだろう。

　モモの才能は明らかだ。そもそも導力に恵まれているということは、世界に愛されていることに等しい。巨大な導力の流れである龍脈に沿って生きてきた彼女はそれをよくわかっていたため、導力が豊富なモモが指をくわえたくなるほどうらやましい。

　モモならば素材も魔導式もなく、教典だけでも地脈の流れに干渉できるだろう。フーズヤードが地道に素材と紋章を組み合わせて魔導式を構築し、さらに儀式導器を作製してと、一カ月は時間をかけることを、一日でできてしまうのだ。

「そんなことができたら、私ならぁ、あそこをああして……ふふうふふうふ。大陸の龍脈地図をもっと素敵に変えるのに一生を費やせるぅ。いいなぁ。モモちゃんさん、いーなー。……はっ！　モモちゃんさんが手伝ってくれれば、いまからでも……！」

「なんで私が手伝うと思ったんですか？」

「え!? 　なんで私の心が読めたの!? 」

「声に出てますよ、駄メガネ」

　呼び方が『メガネさん』から『駄メガネ』に降格していた。うっかりさらした醜態に、年上の威厳とはと頭を抱える。

「そんなことより、大司教ってどんな人なんですか？」

「え？　大司教のことが龍脈より気になるの？　モモちゃんさん、変わってるんだね」

「普通はどこにでも流れている龍脈より身近な大司教のことが気になるんですよ」

　大司教エルカミ。

　フーズヤードは自分の上司の顔を思い浮かべる。

　彼女は当代一の魔導行使者だ。フーズヤードも龍脈を用いた大規模魔導式にかけてはそうそう譲らない自信はあるが、エルカミを前にすればそんな自信は紙切れだと自覚している。

「エルカミ大司教はねー、怖い人かな」

「怖い？」

「うん。すぐ怒鳴るし、いつも機嫌が悪いし、会話すると二言目から愚痴だし、三言目には無理難題で、正直、しゃべりたくない……」

　だんだんと目が ろになっていく。フーズヤードにとっては本気で疫病神みたいな人である。

「ただね。びっくりするくらい、普通の人でもあると思う」

「普通？」

「うん。普通」

　エルカミは さで として位階を昇りつめたわけではない。策謀も陰謀もなく、魔導能力の高さでのし上がった。人格的には、わかりやすい部類だ。

　純粋に、実力と功績で他に代えのない人物となった。

「なにより、あの人の導力は奇跡的だよ」

　言いながらフーズヤードは自分の眼鏡に導力を流す。

『導力：接続──紋章・眼鏡──発動【導力視】』

　フーズヤードの眼鏡が導力光を帯びる。彼女は自分の眼鏡に導力の動きをより詳細に見える紋章を刻んでいる。発動させた紋章魔導を通して、モモの体にある【力】の流れを観察する。

　一度、これでエルカミを見た時に、フーズヤードは感動で言葉を失った。

「うーん……モモちゃんさんもいい線いってるけど、大司教には ばないかな」

「……なんですか、その眼鏡」

「ん？　現象になる前の導力を視認するための紋章具だよ。これで見るとモモちゃんさんは、ちょーっと精神が足らないかな」

　肉体、精神、魂。エルカミはその三つの質と量、バランスが群を抜いている。龍脈至上主義のフーズヤードがうっかり見惚れてしまったほどだ。

　モモの導力を見たフーズヤードは魔導発動を打ち切って、普通の視界に戻る。

「モモちゃんさんは将来に期待って感じだね。ここに来る前まではなにをしてたの？」

「予想はついてると思いますけど、戦闘ですよ」

「やっぱりかー」

　さすがに処刑人の補佐官であるなどという真っ黒なところまでは想定はしていなかったが、概ね予想通りである。

「だからかなぁ。モモちゃんさんは、導力に恵まれている意味を甘く見てるよ。導力が強くて便利、くらいにしか思ってないでしょう」

「はい？」

「いい、モモちゃんさん。導力っていうのは、世界の現象の根幹なんだよ？　人間っていうのは、肉体という素材と精神っていう人格をもった【力】の魔導現象なの。人間の本質は導力にあるんだから、それに接続して操作できることが、どれだけ偉大なのかって考えてみて？」

　突飛に聞こえる理論でありながら、フーズヤードの声は賢人が人を諭す響きを持っていた。

　それは星という巨大な大動脈を追ってきた彼女が二十余年で得た、一つの真実だ。

「……だから、どーしろと？」

「だからモモちゃんさんも、儀式魔導に打ち込もうよ。自分を超えた大きな導力の流れに身をゆだねる快感を──」

「嫌です」

　話のオチが付いた。素っ気なく提案を却下されたフーズヤードは、肩をすくめる。

　そのタイミングで、フーズヤードの教典が導力光を帯びた。 が占有している通信魔導だ。フーズヤードが同調させている相手は大司教であるエルカミだけなので、上司からの連絡であることは間違いない。

　自分の教典に を置いて、内容を確認する。

「モモちゃんさんや」

「なんですか。次、地脈トークを始めたら書類をぶん投げますから」

「違うから怖いこと言わないで!? 　いやさ、うちの上司が、とうとうボケてしまったよ」

「は？　なんの連絡だったんですか？」

「いいよ、聞かなくて。たぶん誤報だもん」

　どんな報告だったのか、質問を放り捨てるフーズヤードにモモが鋭い視線を向ける。いいから教えろと言わんばかりのモモの視線にフーズヤードは肩をすくめて、自分の教典を指さした。

「あははっ、なんか外に──」

　説明しようとした時に、扉が開いた。

　現れたのはエルカミである。彼女はフーズヤードをぎろりとにらむ。

「遅いぞ、たわけがッ。モモをこっちへ寄越せと連絡を入れただろうがッ！　なにをもたもたしておる!! 」

「はいぃ！　申し訳ありませんっ！」

　明らかにエルカミがせっかちなだけなのだが、叱責されたフーズヤードはすくみあがってぺこぺこと頭を下げる。叱責に涙を浮かべるフーズヤードには目もくれず、エルカミはモモへと視線を移す。

「まあいい。この場ですませるぞ。……モモ」

「はーい。なんでしょーか」

「あれが、貴様らの策か？」

「はい？」

　指示語で話されても困るだろうに、とフーズヤードはモモに同情を寄せる。エルカミは疑問符をつけるモモを鋭く 。

「いや、聞くまでもないか。あんなことが勝手に起こるわけがないからな。……ついて来い」

　エルカミが有無を言わせず駅舎を出る。モモとフーズヤードが彼女についていくと、たどり着いたのは二階の回廊の窓辺だ。外からは様子がうかがえない結界となっているが、中から外の風景は普通のガラスと遜色なく見通せる。

　そこから外を見ろとエルカミは指先で窓を いた。

　フーズヤードがなんだと寄ってみれば、驚きの光景があった。

「うっわー……」

　巡礼路から、魔物の群れが迫っていた。野生の動物ではありえないシルエットをしている怪物どもが い寄っている。十や二十ではきかない数である。

「この魔物の量は『 』か？　どうやって を誘導した」

「いや、大司教。なんでモモちゃんさんのせいになるんですか？　言いがかりはやめてください！」

「貴様は黙っておれ！　龍脈に関することしか能がないクズめの意見などいらんわ！」

「ひゃい！」

　先輩としてかばおうとしたのだが、無駄な努力だった。エルカミの大喝に身を縮ませる。

　なにより嫌疑をかけられたモモが気にしている様子がない。

「びっくりですねぇ。なんでしょーかね、あれ」

「あくまでとぼけるか」

「悲しいくらいに信用がないですね、私。ずっと大聖堂にいたじゃないですか」

「事前に仕込みぐらいはできようが。『 』が直々に来ようが、魔物が聖地の結界を抜けるなど不可能だから放置してもいいのだが……モモ」

「はい」

　エルカミの皺がれた指が、窓の外を示す。

「迎撃に出ろ」

「迎撃に」

　下された命令に、モモは自分を指さす。

「私、一人で？」

　 いてから、窓の外の景色を指して、確認。

「死ねと？」

「死んでも構わん。貴様の無実が証明されるとしたら、あの魔物を した時だけだ」

　 なもの言いだ。命令されたモモは腕を組む。

　理不尽な命令だ。義憤に駆られたフーズヤードが立ち上がる。

「え、エルカミ大司教！　いくらなんでもそれは──」

「黙れ。貴様はとっとと『龍門』を使って聖地の外縁部に転移をつなげる準備をしろ」

「──うぅぅ……」

　最後まで言わせてもらえすらしなかった。

　先輩として後輩が守れなかったと落ち込んでいるフーズヤードをよそに、モモは内心でこの場でエルカミを殺して逃げるのと魔物の群れを するのと、どっちが楽だろうかと真剣に していた。

「わーかりましたぁ。やりますよぉー、です」

「も、モモちゃんさん？　大丈夫なの……？」

「別にいーです」

　モモも神官のはしくれだ。エルカミがどれだけ肉体的に衰えていようとも、見ればわかる実力差が、まざまざと伝わる。

　 『 』のような不気味さはない。ただ単純に、彼女には勝てないということが見ていれば伝わるのだ。

　それほどに実力がかけ離れている。

　別に命を懸ける場面でもなし。実際問題、あの魔物の群れに突っ込んでも死なない自信があるモモは、しぶしぶ了承する。

　ありがたいことに、エルカミは 『 』ほど理不尽ではなかった。

「安心しろ。私も出る」

「え？　大司教がですか」

　フーズヤードは眼鏡の奥でぱちぱちと瞬きをする。

　反応したフーズヤードにエルカミが水を向ける。

「なんだ、貴様も前に出るか？　龍脈バカといえども神官だ。やれないことはないだろう」

「滅相もありません！　私みたいなドクズは引っ込んでますぅ！」

　臆病気質なフーズヤードは、半泣きになって、全力で戦闘を固辞した。

　魔物の群れが聖地に続く巡礼の道を埋め尽くしている中で、修道服を着た少女が群れの後方にいる魔物の頭の上にいた。

　古代の草食獣に似た、ぐうっと長く伸びた首が特徴的な魔物だ。四足の足が交互に進むたび振動でウェーブのかかった銀髪が揺れる。

　視界が良好の高みから、サハラは双眼鏡を使って魔物に取り囲まれる聖地を見ていた。

　百を超える魔物の行進である。人間がつくった巡礼路で収まるはずもなく、修道女たちが丹精込めた田園を踏み荒らしながら進んでいる。

「壮観」

　歴史上でも、聖地を攻撃した者など何人いたか。曲がりなりにも聖職者であった自分が、まさか攻める側に回るとは思わなかった。

　サハラが見たところ、修道院にいた修道女たちは避難がすんでいる。 にならずとも、さすが訓練された集団だ。混乱することなく適宜反撃をしながらも聖地に入った。

　魔物は魔物であるというだけで聖地には入れない。魔導で編まれた聖地は、世界一高度な大規模結界だ。逃げ場所としてこれ以上の場所はないだろう。

　聖地周辺部で生活を営む修道女ですら危険を前にして整然とした行動をとれる。

　聖地に赴任している正式な神官が出てくればどうなるか。

「ま、勝てる気はしない」

　サハラとしても戦力差はわかっている。

　魔物が強くなるには時間が必要だ。原罪概念から生まれた生物は、罪を重ねるほど強くなる。人を傷つけ、町を崩し、文明を破壊すればするほど強力になる。

　だからこそ古代文明を滅ぼした一因となった は、この世の混沌に しいおぞましさを得た。

　逆をいえば、生まれたての魔物は召喚時によほどの を注がなければさほどの強さを持たないのだ。

　不肖の自覚はあるが、サハラとて聖地出身の修道女だ。周りで囲んだ魔物の百匹が千匹になろうとも、聖地を攻め落とせるはずがないことぐらい理解している。

　唯一有効な手段があるとしたら兵糧攻めくらいなものだ。聖地の糧はほとんどが自給自足で完結しているため、修道院の田畑を焼けば困窮待ったなしである。ちょうど魔物が踏み荒らしているので、これだけでも嫌がらせとしては十分だ。

　ただそれも、長期的に聖地に籠城させるだけの戦力があればの話だ。本気になれば、半日もかからず殲滅されるだろう。

　数で勝とうとも、質の面でどうしようもなく負けている。下手をすれば、この程度の魔物の群れは優秀な神官が一人いれば駆逐される。それほどに の層は厚い。

　たとえ魔物の群れに『 』の小指が混ざっていようとも、だ。

「なら、どーしてついて来たの？」

　不意打ちの質問に、ぎくりと体がすくんだ。

　おそるおそる目線を落とすと、足元に白いワンピースの幼女がしゃがんだ姿勢でいた。

　上品で利発そうな面持ちとは裏腹に、ぽっかりと虚ろを詰め込んだ瞳。彼女が着ているワンピースには、 の欠落を表すかのように三つの穴が開いている。

　寸前まで、絶対にいなかった。サハラの心を読んだかのようなタイミングでの出現だ。実際に読心されたとしても驚かない。

　なにせ、一度は失ったサハラの体をつくったのは目の前の怪物だ。

「……えと。マノンは、友達だから？」

「まあ、そーなの？」

　 を吐ききれずに疑問符をつけてしまった。膨大な冷や汗を背筋に流すサハラに、追及はなかった。

「それならいいのよ。友達って、とっても大切だものね？」

　ニコニコと笑う幼女の姿が、どろりと溶けて消える。

　しばらく を呑んでいたが、なにが起こることもない。気配がなくなったことに、ほっと の息を吐く。

「 は、これだから怖い……」

　一挙手一投足が、人間から離れすぎている。ただ移動するだけでも、自分を殺して召喚することで動き回る。そのあり方は、すでに人間のものではない。

　東部未開拓領域の『絡繰り世』もそうだった。世界観を塗り替えるほどに人間離れしているのに、なぜか人間に関わる。半端に近い位置にいるからこそ、より恐ろしい。

　サハラの素直な心情を告げると、聖地攻めを断ったらなにをされるかわからなかったので逃げるに逃げられなかったのだ。

　正直、サハラがマノンたちに協力しているのは、事の成り行き以上のものがない。積極的に協力するには理由がないが、逃げ出すには がちょっとばかり怖い。マノンのことも嫌いではないから手伝っているだけだ。

　だからサハラは命を懸けるつもりはさらさらない。今回にしたって、嫌がらせ以上のことはしない。適度なところで逃げる気である。

「おっ」

　聖地はどんな迎撃に出てくるか。負けても構わない気楽さで聖地の入り口を双眼鏡で き込んでいたサハラは声を上げる。

　片方は、知らない老婆だ。だが壮麗な司教服を着ているために正体がわかった。

　大司教エルカミ。当代一の魔導者と誉れ高い神官の頂点だ。サハラが禁忌となったいま、間違っても知り合いになりたくない偉大な人物である。

　逆立ちしても勝てっこない大物だがサハラの心をより強くとらえたのは、もう一人だった。

　服装こそ、取るに足らない白服の神官服を着た少女だ。しかし、かわいこぶった神官服のふりふり改造具合に見覚えがあった。

「これはこれは」

　不穏な声を らし、サハラは双眼鏡を放り捨てる。地面に落下して壊れたそれには目も向けない。

　メノウの神官補佐、モモ。

　彼女はサハラにとっても知らない相手ではない。迎撃に誰が出てこようがどうでもよかったが、まさかの大当たりだ。

　魔物任せで に戦闘をするつもりがなかったサハラは、右腕を前に向けて伸ばした。

　彼女の生身の右腕はゲノム・クトゥルワに引きちぎられた。挙句に東部未開拓領域で原色概念に浸食され、最後にはサハラを完全に蝕んだ義腕だ。

　世界の を原色に分解しては侵蝕し、システムを塗り替える『絡繰り世』の 。

　人の魂と同じく導力を生成する特性を持つが、メノウとアーシュナの二人を圧倒した いの出力は失われている。

　それでも、相応の【力】は残っていた。

　サハラは義腕の手先を遠方のモモに向け、意識を集中する。

『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル・遠距離 型】』

　金属部品が組み上がる音を立てて、右腕が変形する。

　義腕としての構造から、射撃武器へと変換される。肩口が膨らみ衝撃を吸収する機構に、逆に肘から先はまっすぐに、細く、長く伸びていく。

　サハラの右腕が、長大な狙撃銃と化す。

　 を立てて、銃身を固定。変形した自分の右腕へと、導力を流す。導力銃の機構を完全再現した武器腕は自動的にサハラの導力を硬質化し、弾丸の形へと生成する。

　スコープ倍率を多めにとって、覗き込む。

　大司教であるエルカミは、どうやら専守防衛の姿勢をとっているようだ。自分に襲い掛かる相手以外に積極的な攻撃に出ていない。

　反面、桜色の髪をした少女は迷いなく魔物の群れに突っ込んで紋章魔導により高速振動している糸鋸を振り回している。その れっぷりは見間違いようもなく知己の人物だ。

　ただしサハラには友好的な感情は欠片もない。

　倍率を上げ、照準を合わせていく。少女が二つ結びにしている桜髪を留めているのが、赤いリボンではなくシュシュなのを見て、口元を める。

「リボン、なくしてやんの」

　赤の細身のリボン。嗜好品などない処刑人を育てる修道院で、これ見よがしに付けていた品は任務中の戦闘で失ったのか、はたまた別の理由か。サハラは知る もないがここから見えるのは、モモがリボンを付けていないという事実だ。

　メノウはいまだ、黒いスカーフリボンで髪をくくっているのに。

サハラの修道服をはぎ取ったどっかの誰かがつくった、あのリボンで。



　左手を、そっと引き金に添える。

「サバサバ系女子の私にも、忘れられない恨みはある」

　自称サバサバ系女子のサハラは、導力銃となった右腕から【力】の弾丸を放った。

　寸前で気がついたのは、直感としか言えなかった。

　あえて要因を挙げるのならば、監視するように後ろに立つエルカミの意識がモモから外れて遠方に向いたからというのもある。それにつられて、ねばりつくような視線と殺意を察知した。向けられた感情は周囲の魔物のおぞましさよりも粘着質であり、むしろ気がつくなというほうが無理があったのかもしれない。

　モモは本能でとっさに頭を下げた。

　次の瞬間、モモの背後で大口を開けていた魔物の頭が弾け飛んだ。

　一瞬遅れて、乾いた発砲音がモモの耳に届く。

「狙撃……!? 」

　珍しい攻撃に驚きつつも、即座に魔物を盾にする。

　どこから。外した初弾、流れ弾で弾け飛んだ魔物の肉片から方角の見当をつける。

　おそらく魔物の群れの後方からだと分析をしているうちに、二発目。

　やはり着弾に遅れて、モモの耳に発砲音が届く。

　導力銃は禁制品である。

　 に隠れて流通している導力銃の中でも狙撃型のものは少ないし、スナイパーを名乗れる精度で狙撃銃を取り扱える人間はさらに限られる。

　モモにしても狙撃されたのは人生で初めてだ。

　だが対処だけならば戦闘訓練の一環として教わっている。そのため一発目と二発目の狙撃間隔に違和感があった。

「……移動、してない？」

　遠距離から攻撃できるのなら一発ごとに動くのが定石だろうに、弾着の方向と発砲音に変化がなかった。

　よほどのへたくそか、相当に められているのか。もしくは護衛でも にいるのか。

　考えをまとめるために、とんとん、とつま先で地面を叩く。

　着弾から発射音が聞こえるまでの間から計算すると、距離はおよそ四百ほどだ。導力強化をしたモモならば、狙撃手を相手に回しても距離を詰めるのは分の悪い けではない。

　一瞬だけ目をつぶり、ルートを頭の中で描く。

「やってやろうじゃありませんか」

　決意を固めれば早いもの。

　モモは、まっすぐ駆け出した。

　二発目。

　狙撃の音が鳴りやむタイミングで、挑発に乗ったモモがまっすぐに突っ込んできた。

　相手の動きを把握するため、サハラは背の高い魔物の頭の上で膝を立てて座っていた。

　場所は一発目の狙撃から動いていない。モモもサハラが隠れ潜む気がないことを察したから飛び出した。

　予定通りだ。あえて狙撃場所から動かずに見つけさせたサハラの思惑通りの展開である。居場所を把握されたいま、動いても意味はない。

「単純バカ」

　激情家のモモのこと。根気比べをするよりかは、耐え切れずに飛びかかってくるに決まっていた。

　迎え撃つまでだ。

　突進してくる桜色の頭を う。狙撃型導力銃となった右腕が、サハラの導力を吸い取り【力】の弾丸を生成。セットされるのを感じ、引き金を絞る。

　三発目。

　導力弾が銃身を走る摩擦熱で、一瞬だけ大気が揺らめく。大気熱でゆらりと歪むスコープの景色。モモがのけぞったのが見えた。

　ヒット。いや。

　モモは足を止めていない。明らかに直撃したにもかかわらず彼女が無事な理由を小さく呟く。

「【障壁】」

　狙撃を防ぐために、神官服の紋章【障壁】を発動させた。予定通りだ。

　導力銃は誰でも使えるという点で凶悪な兵器だが、 にとっては対処がたやすい兵器でもある。神官服に刻まれている紋章【障壁】を貫通できる威力は出ないからだ。

　だが紋章魔導は、一度の発動から再度の魔導構築まで二、三秒かかる。一秒以内に二度以上の紋章魔導を発動できるような超絶技巧の持ち主もいるが、それは だ。サハラの知る限りではメノウや 『 』、そして司教以上の神官ならば可能かというレベルである。

　モモにメノウほどの導力操作技術はない。【障壁】の防御ははがした。次は けるしか手段がない。ここでもう一度来る狙撃をかわせるかどうかが勝負の分かれ目、とモモは思っているのだろう。

　サハラは余熱さめやらぬ銃身を下げて、立ち上がった。接近の足は緩めなかったものの、狙撃手らしからぬ動きにモモがいぶかしげな表情を浮かべる。

　狙撃をするには、近すぎる間合い。おあつらえ向きである。

　別にサハラは、狙撃手ではないのだから。

『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル・中距離掃射型】』

　サハラの武器腕が、再度、組み替えられる。

　細身のシルエットから、鈍重さを感じさせるほど武骨で図太い円形に。銃身が円柱をいくつも ねた形へと変化する。

　サハラは自分の右腕がどういうものか、把握しつつあった。

　自分の義肢を形成する、原色の魔導素材。

　これは極小の魔導兵の集合体だ。

　無機物でありながら、有機的に変化する。三色の素材がそれぞれに組み合わさって、自在な形に変化する。組み合わせ次第では、意識を形成することすら可能だ。三原色の魔導人形はその極致であり、間違いなく人類発祥以来の人間以外の知的生命体である。

　点の遠距離狙撃から、面制圧の機関銃へ。

　モモはサハラが居座る魔物の足元に到達している。もはや完全に目視できる距離だ。

　ちょうど機関銃の制圧範囲である。まずは騎乗の魔物を攻撃してサハラを叩き落としてやろうとしていたモモがぎょっと足を止めた。

「ボコボコにされた、子供時代の私の恨み──」

　現在進行形で恨みを抱え続けていなければ絶対に口から出ることのない を呟きながら、導力強化。発砲の反動に備えて身体強化をしたサハラの全身が導力光を帯びる。

「──受け取れ」

　掃射。

　機関銃となった右腕の銃身が高速回転する。

　途絶えることなくつながった発砲音とともに、導力の弾丸が降り かれる。もはや狙いはつけていない広範囲攻撃だ。周囲にいる魔物も巻き込んだ攻撃は、到底かわせるものではない。

　メノウならば教典魔導で防いだだろう。

　だがモモには防御できる紋章魔導の用意もなく、なすすべなく銃弾を全身に浴びた。

　モモが に飛び込んできた時点でサハラの勝利は決まっていた。

　導力の弾丸がまき散らされるのにしたがい、サハラの導力が減っていく。摩擦熱で一気に右腕の温度が上がる。排熱が追いつかない。

　これ以上は銃身が歪みかねないと、文字通り手を止める。

　慣性で回転する銃身を下ろしながら、着弾地点を確認。乱射によって地面は耕され、もうもうと土煙が上がっていた。

　これで無事のはずがない。死体の確認はこれが晴れてからと気を緩めた時だ。

　土煙を切り裂いて振るわれた糸鋸が、サハラが乗っている魔物の首に巻きついた。

「は？」

　あ然とする。モモは生きていた。

　神官服やタイツはボロボロで、ところどころから薄く血が出ていたが重傷には程遠い。暴れようとする魔物を首に巻いた糸鋸で力ずくで押さえ込んでいる点からも、健在なのは疑いようもない。

　確かに、込めた導力が不足気味だったかもしれない。弾数が多い分、狙撃に比べ一発の威力はかなり劣った。それでも周囲の魔物はズタズタになる威力だったはずだ。

　そんな弾幕のなかで、どうやって生き残ったか。

　単純明快。

　モモの体を覆う、導力光の 。

　魔導になる以前の導力操作、肉体の性能を引き上げる導力強化で耐え抜いた。

「 ったいですねぇ……！」

　モモが苛立ちを吐き捨てる。

　紋章や教典での防御魔導ならばともかく、生身の導力強化で弾くなど信じがたい。 とはいえ魔物をひき肉にする威力は、痛いですむレベルではないのだ。

「モモ……！　相変わらずの導力モンスターっぷりね」

「はあ？」

　サハラの声を聞いて、モモが顔を上げる。

　サハラが修道院を去って以来、およそ十年ぶりか。顔を合わせたモモが、サハラをはっきりと目視して言う。

「誰ですか、あんた」

　びきっ、とサハラのこめかみに血管が浮いた。

　モモは二つ結びの桜髪を揺らして、声を低くする。

「知っている奴にだって気軽に呼ばれたらムカつくのに、知らない奴に名前を呼ばれたくないんですけどぉ？　ていうか、なんで私の名前を知ってるんですか？　私のストーカーですか？　気持ち悪いので、いまから殺しますね」

　こめかみに二本目の青筋が浮いた。

　修道院では二度三度と襲い掛かってきたくせに、挙句の果ては人の服を までしてくれやがったというのに、忘れやがったのか。

　 りでも挑発でもなく、本気でサハラのことなどきれいさっぱり忘れたモモは会話を放り投げる。

「まあ、いいです。覚えてないってことは、どーでもいい奴だってことです」

　魔物の動きを押さえていたモモの糸鋸に導力が流される。

『導力：接続──糸鋸・紋章──発動【振動】』

　振動する糸鋸が、巻き付いていた魔物の首を削ぎ落とした。

　首を刈られた魔物がどうっと倒れる。上に乗っていたサハラは落下しながら義腕を初期状態に戻し、着地。二人の目線が対等な位置になる。

　サハラの服装を見たモモが、鼻を鳴らす。

「修道女ですか？　へー、その年で修道女のままとか落ちこぼれですね」

　ちなみにモモやメノウが非常に優秀な部類であって、二十歳ぐらいまでは修道女でも普通である。

　それを承知で、モモは小憎たらしく口元を吊り上げる。

「自分の才能のなさに将来を悲観でもして禁忌の仲間いりですかー？　雑魚と落ちこぼれをこじらせた劣等感の詰め合わせ見本みたいな生き方してますねぇ。大丈夫ですよ。そのみじめな一生、いまここで終わらせてあげますからぁ。感謝してくださいねー？」

「……ねえ、モモ」

「名前で呼ぶなって言ったの、聞こえませんでしたか？　もう一回言いますよ。名前で、呼ぶなって、言ったん、ですけどぉ？」

　一区切りごとに強調した嫌味ったらしい要求は、無視。

　サハラは無表情で義腕の親指に当たる部分を下に向けて殺意を表明する。

「これから死ぬのは、そっちだから」

「却下です」

　第二ラウンド。

　モモが距離を詰める。接近戦は彼女の だ。先天的に導力量に恵まれたモモは、異常な強度まで身体能力が跳ね上がる。導力強化で引き上げられた肉体性能は、本来ならば神官の主武器である教典魔導の必要性すら感じさせなくするレベルである。

　大体の生物は、殴れば れて死ぬ。

　経験則によって導かれた最良で、 を振りかざす。

　対してサハラは、棒立ちだ。

　死を経験した彼女は、自分自身よりはるかに性能が勝る右腕に信を置いていた。なるほど自分に才能はない。正式な神官にすらなれなかった。

　だが、自分にはこの右腕がある。

『導力・素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル・銀の籠手】』

　二人の拳が、ぶつかり合った。

　二つの拳が衝突した余韻が、離れた場所にいるエルカミの肌にまで伝わる。

　一度で終わらず、二度、三度と。まき散らされる衝撃と騒音が行われている戦闘の激しさを知らせる。

　そちらに関わることなく、エルカミは教典に導力を流し込み、さらに教典魔導を展開させる。

　エルカミの戦いは、モモのような肉弾戦を 発生させなかった。度重なる教典魔導は、一つ一つが効果を途切れさせることなく続いている。

　精緻美麗な教典魔導。

　導力の鐘が鳴り響き、教会の外壁が魔物を み、柵を広げる杭が敵を つ。絶え間なく展開される教典魔導が の陣地を広げ、土地を制圧して支配する。戦場に展開された教典魔導によって、すでにエルカミの姿は見えなくなっていた。

　これこそが である神官の正道。

　 にまぎれることなく身を差し出し、光で周囲を照らす希望そのものの戦い。処刑人として育てられたモモやメノウが得ることのなかった、神官としてのまっとうな強さだ。

　複数の教典魔導を展開する大司教の周囲に魔物たちは近づくことすらできなかった。物理的に、魔導的に存在する壁を越えることもできずに、百はいた魔物の半数は消滅している。残りはなんとかエルカミのいる周辺から逃れただけの魔物ばかりだ。

　エルカミの興味は、最初から有象無象の魔物などに向いていない。

「戦うふり……という様子でもないな」

　モモの容赦のない攻撃に、手を抜いている気配はない。傍観しているエルカミにまで届く殺意も本物だ。魔物の襲撃と協調している様子も皆無である。

「考えすぎだったか……？　あの程度では、どうあがいても問題にならん。そうなると、だ」

　エルカミが声を向けた先には、魔物の群れの本丸とも言うべき相手がいた。

　白いワンピースを着た、あどけない童女。力なく無害に見える、 にして正真正銘のバケモノだ。

「小指。貴様はなにをしに来た」

「たまぁに、いるのよね」

　彼女は質問に答えるそぶりも見せず、けらけらと笑う。

　彼女の全身は導力の釘によって打ち付けられて、虚空に張り付けにされている。

「あなたみたいな人。おかしいほどに、強い人。導力に愛された人。生まれつき恵まれて、とっても強くて、最弱のあたしとしてはうらやましい限りだわ」

　こぽこぽと血をこぼしながらも、苦しがることなく発声をする。死ぬことすら許されていないせいで、彼女お得意の自分を げる再復活が封じられているのだ。

　そんな状況にあって、 は手を伸ばす。自分を阻む清らかな教会の壁に、ぺたりと血の手形をつける。

「でも、ねえ」

『導力：生贄供犠──混沌癒着・純粋概念【魔】──召喚【かわい、かわいと子供なく】』

　ずだだだだっ、と白壁に赤い手形が増殖する。駄々をこねる見えない幼児の集団が、小さな手で結界を叩いて壊そうとしているかのようだ。一打増える度に、生贄に捧げられた周囲の魔物が溶けていく。

　果たして、周囲の魔物が生贄として完全に尽きるよりも結界が砕けるのが先だった。

　現れたエルカミは、人生の佳境にある老婆ではなかった。

　年の頃は、二十か、そこら。壮麗な司教服を着ているのがおかしなほど若々しい。 の強い顔立ちも、苛烈にして烈火の もエルカミのものに間違いない。

　 一つなく若々しいエルカミを見て、 は の声を上げた。

「まあ、やっぱり！　ここまで強いなら、きっとそうだと思ったわ。あなた──【 】なのね？　それも……最近でしょう。違う？」

「……っ」

　 の指摘に【魔法使い】の名を持つエルカミの若々しい顔が歪んだ。

　先天的な高出力の導力と後天的に獲得した繊細な導力強化によってのみ可能な、細胞レベルでの導力強化。導力に愛され、導力強化の極みに至ってしまったゆえに、意図せず若返りを可能としてしまったのがエルカミという大司教にして【 】だ。

「【 】の資格は不死身って、千年前から決まっているもの。でも、あなた、若くなれるのにどうして老人のふりなんてしているの？　まさか普通に歳をとりたいなんていう理由じゃないわよね？」

「黙れッ！」

　ずばり言い当てられたエルカミは、瑞々しい怒声を響かせる。

　彼女は、年をとりたかったのだ。

　一人だけを、置いていくことなどしたくなかった。一人だけ置いて行かれることなど選びたくなかった。エルカミのことを知った時の友人の顔を忘れることが、どうしてもできなかった。

　同世代で、 れて、同じ速度で の位階を上げていた同胞。

　卑賎卑屈で、無信心だった自分とは違う聖職者。誰よりも敬虔で、誰よりも正道を歩んでいた神官──オーウェル。

　彼女が若返ったエルカミの姿を見た時の顔が、忘れられない。

　あの時からずっと、エルカミは自分の【力】に、【魔法使い】などという称号に怒りを抱え続けている。

「大丈夫よ。あなたはこれからだもの。友達もみんな死んで、忌避されて、そうしてどっぷりと浸かるのよ。いっぱい、いーっぱい生きましょう？」

　ろくな抵抗もできない状態になってなお、言葉で魔を差しこむ。【魔法使い】などと呼ばれている不死の新米に、千年前から存在する幼女が手招きする。

　戯言だ。エルカミは相手の言葉を り捨てる。

「貴様ら異世界人に言われたくないな。ここに来ただけで、才能も、努力も、情熱も、すべてを蹂躙する権利を得た、貴様らにはな」

　メノウとアーシュナがあれほど苦戦した相手を前にしても、エルカミの司教服には すら届いていない。

「あら、まあ。あたしたちが嫌いなの？」

「貴様らを好む者などあるものか。『主』のご帰還により、ようやく貴様らが排除される機会を得たのだ」

「『主』？」

　 が目を丸くする。

　教典に描かれている『主』。千年前に滅びた際に、聖地にあっていまの文明基礎をつくり上げた大いなる存在の帰還。

「帰還って……まあまあ、まあまあ！　まだ、そんなことをしてるのね、あの人は！」

　古代文明滅亡の一因たる幼女は、きゃっきゃと笑う。

　人格を損なった とはいえ、思考回路がないわけではない。常人には理解しがたいが、 は原罪概念に相応しい行動規範で判断を下し、動いている。

「誰の差し金で、なにをしに来た。気まぐれにしては、いささか恣意的だ。ここで小指を差し出すことになんの意味がある？」

　すでに死なないだけの子供となった に問いかける。

　もちろん『 』とまともな意思の疎通がはかれるはずもなかった。

「意味？　意味……必要かしら。あなたたちを殺そうとするのに。あなたたちに、殺されようとすることに、意味はいる？」

　下手をすれば、この聖地攻めにしても意味などないのだ。

「あなたは、確かにとっても強いわ。あたしじゃかなわないくらいよ。でも、知っていた？　あたしを目印にすれば、一瞬だけつなぐことができるの」

　果たして は、にっこりと に笑う。

『導力：生贄供犠──混沌癒着・純粋概念【魔】──召喚【おおきなのっぽの古い 】』

　地獄につながる門が開いた。

　地面に、巨大な影が生まれる。

　数カ月前に、出現しただけで小さかれども一つの島を粉々に粉砕した巨軀。

　新たに生みだしたのではない。 か彼方であれ、すでにこの世に生みだされた魔物を自分のいる場所とつなげただけの召喚魔導が展開される。

　リベールの町での被害は甚大であったという報告はエルカミも受けていた。

「不愉快だ」

　魂から湧き上がる導力が、肉体に満ちる。細胞の一つ一つに親和し、活性化して、全盛期を取り戻す。両腕に抱えたエルカミの教典が、神々しいほどの光量を発する。二十代の若々しい女性の姿を取り戻したエルカミは、教典魔導で地脈に接続。彼女はそれを十全に った。

　すべてを教典に注いで、攻勢の魔導を練り上げる。

『導力：接続──教典・十四章三節──発動【伸ばせ、天よりも高く、月に届くほどに】』

　輝く剣が、魔物の巨軀を貫いた。

　地脈の流出を光刃に変えた剣は、 が呼び出した魔物すら超える規模に広がる。

　一つの町を維持するに足りる導力により、魔物は両断された。

　 の操る魔物は巨大であり、強大だ。

　だがこの世界に生まれた人間でも、対処できる者がいないわけではないのだ。

　 には『怪物』ゲノム・クトゥルワが。 には『最強』エクスぺリオン・リバースが。

　 にある大司教という称号は、その二人になんら劣ることのない力の証明だ。

「まさか大司教たる私が、大きいだけの魔物一匹、対処できないとでも思っているのか？」

「まあ、まあ、そんなことはまったく思ってないわ。あなたの言う通り、たかが一匹だもの」

　無尽の魔物を召喚できる は驚く様子すらない。いまの魔物は攻撃のために呼び出したのでない。呼び出したのは、もっともっと、それこそ四大 と謳われる『 』でも手に余るものだ。

「ほぉら、来たわ」

　彼女の体から、こんこんと白い霧が発生する。虚空から生まれた霧が、 の小さな体にまとわりつき、離さぬようにとへばりつき、尽きることなく湧き上がる。

　 を中心に き続ける白い霧が尽きる様子はない。事実、この霧は尽きないし晴れることもない。

　充満しはじめた霧を見て、エルカミが顔を歪めた。

「なるほど、それが狙いか」

　聖地は強固な結界都市だ。だが南で『 』として の本体を閉じ込め続ける霧の結界も、聖地に劣るものではない。

　強力な結界同士が、効果を相殺する。皮肉なことに魔物を閉じこめるという霧の結界は、逆説的に霧のある場所ならば魔物の存在を許すことを意味している。

　霧の流入とともに魔物が聖地へと入り込める状態になった。いかに教典魔導を使いこなすエルカミといえども、上空も含めた全周囲からの魔物の侵入をすべて阻むのは不可能だ。目の前の を討滅しなければ霧が収まることはないが、小指程度であれ、死なないからこその四大 だ。

「だが、聖地をそこらの町と同じにするな」

　聖地に入り込んだ魔物が瞬く間に減っていく。

　聖地の住民は、みなが 。訓練を受けた精鋭だ。多少の魔物に劣る道理はない。

　エルカミは、自分の体を老化させる。大司教として表に立つには、当たり前に年を取る必要がある。自在に若返る人間が、普通の人間とともにいられるはずがない。

　いつか他の【 】のように、裏に潜ることになる。

　だがそれは、いまではない。彼女は【 ：魔法使い】である以上に、表舞台に立つ大司教なのだ。

「ここに住まう人間に、弱卒はいない」

　 に、 の小指が呼び出した程度の魔物に負ける者は一人としていなかった。

　聖地がにわかに騒がしくなる中、神官ながら弱卒を自認するフーズヤードは、ふんふんと鼻歌を歌っていた。

「眼鏡のいいところはー、うつむいて泣いてもー、涙がおちないことー」

　即興の歌は、曲調こそ明るいものの歌詞が壊滅的に暗かった。

　自分の情けなさに、自己嫌悪が募っていた。後輩を戦場に送りながら、自分は大聖堂に引きこもっているのである。

「でも、怖いしなぁ……」

　とうとう聖地にまで魔物が入ってきていた。フーズヤードとて正式な神官なので魔物の一匹や二匹相手ならば負けないが、迎撃には出なかった。心の底から戦いには向いていないのだ。

　聖地に魔物が入り込もうとも、物理的な出入り口がない大聖堂までは入ってこられない。

「このまま籠城すれば……」

「おい」

「ふぁい!? 」

　絶対に隠れるぞと覚悟を決めていたフーズヤードに声をかけたのはエルカミだ。司教服の老婆の姿を前に反射的に、びしっと姿勢を正す。

「え、エルカミ大司教……？　モモちゃんさんと一緒に魔物退治に出たんじゃないんですか？」

「貴様に説明する必要があるか？」

「ありません！」

　じろりとひとにらみされてしまえば、抵抗のしようもない。

「魔物の騒ぎなど些細な問題だ。それよりも、塩の大地までの転移魔導陣は順調か」

「はいっ。導力路の接続は完了してます！　塩の大地までの道は完成しているので、いつでもお申し付けください！」

「そうか、報告の通りだな。発動から転移魔導陣の固定時間はどれほどだ」

「んん？」

　固定維持。それは要件にあっただろうか。もちろん行き帰りの時間は必要だから経路の確保は多めには見積もっているが、ここからさらに注文が増えると詰む。具体的に言うと、フーズヤードの睡眠時間が消える。

「て、天脈の順路がずれるので、指定の日時から三十六時間以上 てば導力路が霧散しますけど……問題ありますか？」

「いいや、ない。よくやったな、フーズヤード。念のために確認する。案内しろ」

「は、はい！」

　褒められた。ぱあっとフーズヤードの表情が華やぐ。

　大司教直々にチェックとは、随分と気合が入っている。フーズヤードは、上司に自分の成果を披露すべく、『龍門』の前へと案内した。

「そうか……やはり『龍門』を利用していたのだな」

「はい？　エルカミ大司教もご存じでは？」

「ああ、昔の話だったものでな。導力が繫がっていれば、【転移】の発動は容易だな。早めに発動させて道を固定しろ」

「はい！」

　返事をすると、さっそく魔導の発動に取り掛かる。ほどなくして、『龍門』に新たな道が設定される。

「できました！　あとは駅舎のほうで【転移】ルートを設定するだけのなので、誰でも──」

　フーズヤードの語尾が途切れる。彼女の目の前で、エルカミの姿が崩れたのだ。

　現れたのは、藍色の神官服を纏った若い少女である。ふえ、とフーズヤードの口から変な声が漏れる。大聖堂内に自分が把握していない人物がいるはずがないという自負が、彼女の混乱に拍車をかけていた。

　彼女の首筋に、正体を現したメノウが手刀を入れる。

「申し訳ないとは、思っているわ」

　フーズヤードの意識が、暗転した。

　少し時間をさかのぼり、魔物が聖地に入りこんだタイミング。外の騒がしさは、大聖堂のメノウがいる場所にも届いていた。

　漏れ聞こえる会話と大聖堂の南塔から見える光景。 の出現となると、マノンの手引きで間違いない。

　マノンの襲撃は、メノウの計画の内である。

　山間の温泉街を出立する際に、着物を一つ、かすめ取ったかいがあった。あれは変装のためだけではなく、マノンに自分の行動を知らせる役目もあった。目ざとい彼女ならば間違いなく気がつく。あのタイミングでカガルマがいなくなったことと合わせれば、マノンはメノウの行動を読んで聖地まで追ってくるだろうと踏んでいた。

　そしてマノンが聖地に入ろうとする限り、結界をどうにかする必要がある。

　そのためには魔物による襲撃が絶対に必要だ。

　聖地が襲われるような状況になった時に、聖地にいる人間の初動は容易に推測できた。

　全体の状況を把握して、なにが起こっているのかを確認する必要が生じる。特に大聖堂の出入りを管理するフーズヤードに送られるだろう情報の中には、メノウが欲する「トキトウ・アカリの状況」と「塩の大地に向かう転移陣の状態」が含まれていた。

　危険はあった。そもそもメノウが大聖堂に忍び込んでいること自体がリスクの塊だ。『盟主』などという信用が欠片も置けない相手と手を組まなければならなかった。

　だが、欲しい情報は手に入れた。

「これもモモのおかげね」

　モモからフーズヤードの情報を得られたことで、立ち回りの幅が飛躍的に増えた。エルカミの姿をとることで彼女を騙し、『塩の剣』がある場所までの道を確保した。

　あとは【転移】を使って塩の大地に先んじればいい。自分がいなくなった入れ替わりで、マノンが入ってくる。彼女が大聖堂に来ることで、メノウが侵入したという事実自体がなくなる。

　本番は、これからだ。

　アカリを殺すことが、自分の義務なのだ。

　アカリはメノウに友情を けてくれた。

　メノウにできるのは、彼女を彼女のままに殺すことだけだ。 に任せては、アカリの人格は保障されない。メノウのことすら忘れ、ただの として生涯を終えてしまう。

　だからメノウの手で、殺すのだ。

「ここまでは、計画以上」

　塩の大地に転移したあと、メノウは向こうで潜み隠れるつもりだった。 がアカリを殺す手段が『塩の剣』である以上、メノウが待ち構えていようともアカリを引き連れる必要がある。先に『塩の剣』を確保することで、絶対的なアドバンテージを得るつもりだった。

　フーズヤードが漏らした情報をもとに、メノウがホーム中央にある駅舎に入った時、背後で足音が聞こえた。

　ぱたぱたと軽い足音には、覚えがあった。

「メノウちゃん！」

　呼び声に振り返ると、アカリが駅舎へと駆け寄っていた。囚われているはずの人物の登場に、メノウは戸惑いながらも口を開く。

「アカリ……？　どうして、ここに？」

「どうしてって！　あの魔物の群れ、わたしのいたところまで、騒ぎが届いてたよ！　なんか、騒ぎが起こったんでしょう？　それでわたしを見張っていたあの赤黒い神官も駆り出されて、自由に抜けだせたんだ！」

「そう、なの？」

「うん！」

　アカリがいま語ったのは、事実だとするならばメノウにとって都合がいい。このまま、アカリを連れて『龍門』をくぐればいいからだ。

「それでも、ここでメノウちゃんに会えるとは思わなかった。本当に来てくれたんだね」

　三歩圏内。腕を伸ばせば手が届く距離に、えへへと笑うアカリが近づいた時だ。

　煙の、臭いが鼻をかすめた。

　覚えのある香りだ。メノウは、ぴたりと動きを止める。伸ばした手をそのまま牽制の形に、一歩、踏み込ませなかった。

　その差は、明白だった。

　胸部に、わずかな痛みが走る。

　棘が突きつけられたような、鋭い痛み。そちらには視線を向けない。ただじっと、目の前の人物を見る。

「メノウちゃん？」

　メノウに向けて、アカリが不思議そうな視線を向ける。その手にはなにも握られていない。

　だが。

　メノウは、そっと自分の胸部に手を当てる。

　そこに、ぎりぎり刺さらなかった、なにかがある。

　再度、アカリを見る。

「 ？」

　メノウの呼び声に、きょとんと目を瞬いた。いきなりなにを言っているのか、訳がわからないという困惑がにじみ出ている。

　メノウは も警戒を緩めない。姿形などは、意味がない。見た目に惑わされる愚を重々承知している。

　くはっとアカリの顔が笑みで歪んだ。

「正解だ」

　ぐにゃりと周囲の光が揺れる。本来ならば身体強化の際に発生する導力光の輝きを任意に操ることで、視覚を欺く技──『導力迷彩』。空間に発生した波紋が収まる頃には、少女とはまったく異なる姿があった。

　 『 』。

　導力迷彩で姿を偽っていた女性が赤黒い髪を揺らす。

　 の前で、固い面持ちのメノウは立ち尽くす。対して はいつもとなんら変わらない。

「よく来たな、メノウ」

「……はい」

　歓迎とも皮肉ともとれる言葉に、ただ一言、返事をする。

　アカリを確保するにあたって、 と戦うことになるのはわかりきっていた。

　覚悟はしたはずだ。メノウは自分の命を懸けて、聖地に忍びこんできた。

　だというのに、いざ彼女を前にしたいまとなって、用意していたはずの言葉が消えていた。

　無意識のうちに唾を呑み込もうとして、口内が、からからと干上がっていることに気がつく。自分から話しかけることすらできない。いまのメノウの心地は、店先で窃盗をして捕まった子供が親の前に引っ立てられた心境とよく似ていた。

　 は、なにを言うだろうか。

　失望するのか。嘲笑するのか。あるいは、激怒するのか。

　黙り込むメノウに、 『 』が口を開く。

「トキトウ・アカリは迷っていたぞ」

　一言目から、虚を突かれた。

「あれは逃げ出すこともできず、かといってお前を受け入れることもできていない。滑稽だな。思いつめて迷走し、どこにも居場所を見つけられない。『迷い人』の名前そのままだ」

　いきなりアカリの話をされるとは思っていなかった。

　それだというのに、なぜかひどくメノウの芯を突いたセリフだった。

「なにも、聞かないんですか」

　なぜか、すがるような質問が出た。

　 はメノウがここにいることを当然として対応しているが、命令違反の末に無断で大聖堂に忍び込んでいる。そのことについての言及はなかった。

　なぜか無性に、悔しさが湧いた。

　ここにメノウが来た理由を、聞いてほしかったのかもしれない。

「お前はお前なりの答えを出した。そうだろう？　とっくに私の修道院を出た人間に、 である私が口を出す必要があるとも思えないが……しいて言うのなら、メノウ。お前は間違っている」

「間違っていることくらい、わかっています」

　メノウの目的は簡単だ。

　 の命令に逆らって、アカリを殺しに来た。アカリの人格を損なわせようとする の手段ではなく、アカリをアカリのままで殺しに来た。

「いいや、わかっていない」

　 の口ぶりは、まさしく叱責だった。

　認められるはずがないのが当然なのに、方向性がまるで違う。 の言葉は信じられないほどにメノウの胸を揺さぶった。

「お前はトキトウ・アカリを殺しに来ただろう？」

「……はい」

「友人となった奴が となる前に、自らの手で終わらせたい。『 』の有様でも見て、そう思っただろう？　感傷的なことだな」

「それは、悪いことですか？」

　なにを言っている。会話に流されるまま無意識に出した問いに、メノウの心が揺れる。意思が定まらない自分を自覚する。

「バカめ」

　果たして、 はメノウの世迷いごとを言下に切って捨てた。

　 『 』は、からんと虚しい声を響かせる。

「人殺しに意味を求めたな」

　ゆらりと一歩前に出た の長身に気圧される。

「意味も、手段も、意義も、信念もいらん。なんのためか知らずとも人を殺し、なにがなくとも人を殺し、人を殺しても変わらずにいられるから私たちは悪人なのだと教えたはずだ」

　メノウは に重心を移して、じりりと後退する。

　アカリはいない。ここでメノウが戦闘する意味は薄い。 にメノウの潜入がばれたのは失態だが、取り返しはつく。

　前回に出会った時、 がメノウを確保しなかったのは、それが彼女の役目ではないからだ。

　あの時、メノウは に逆らわなかった。表面上とはいえ彼女から言われた任務を と受け入れて、アカリを引き渡した。取り返しに行く約束こそしたが、 はあえて聞くことをしなかった。

　 『 』は、禁忌の予防を行わない。

　どれだけ明確でも、これから罪を犯そうとしている人間を止めることも、処分することもない。人の迷いに助言することなくせせら笑い、良心と禁忌を求める心で揺れる天秤を静観する。

　彼女が処刑人としての刃を握るのは、誰かが禁忌を犯してからだ。

「私たちに、報いなどない」

　いまのメノウは命令違反の無断侵入者だ。理由がどうであれ、異世界人のために大聖堂に忍び込んだ大罪人である。

「私の教えた道から外れたお前の決意のほど、見てやろう」

　 を突破するしかない。

　背筋を う恐怖をねじ伏せた。四の五の言っている場合ではない。すでに目の前にいるのだ。

　自分の人生において、最大の敵が。

　メノウは太もものベルトに仕込んだ短剣を引き抜いた。紋章が刻まれた短剣に導力を流す。 も、ほとんど同じタイミングで己の短剣に刻まれた紋章魔導を発動させる。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【疾風】』

『導力：接続──短剣・紋章──発動【迅雷】』

　師弟の紋章魔導が衝突した。